

童話の撰擇とその心理的基礎

文部省囑託 青木誠四郎

幼兒の教育には、童話はかなり重大な意味をもつてゐる。幼兒のもつ世界は、想像の作る世界であつて、目に見ゆるもの、觸れるものが、すべて彼等の興味にふれて、想像をつくりあげる。幼兒がきく童話に於ても、この間の心理が行はれて、愉快おく能はざるものがある。最も幼兒等の生活に則したものであるのであるから、この間に幼兒の感情を醇化するようにしてゆくことは、幼いものゝやがて築くべき人格の上に、美しい果實を結ぶために甚だ大切なことである。

さてかくの如く童話が幼兒の感情生活に重大な關係があるとするれば、われわれは、その話し聞かせる童話についても、教育的の見地を忘れてはならないが、一方に於て幼兒の心理的事實を知らなくてはならない。この心理的事實に基づいて、いかにすれば幼兒の生長の途次にあたつて、その本來の感情を醇化することができるかを考へなくてはならない。こ

れがためには幼兒にきかせる話の選擇には、まづ第一に幼兒の心理を知つて、その上にこれをどんな風に導いていつてよいかについて、一定の考へをしてゆかなくてはならないのである。もし幼兒の童話をきく心持について理解なくして、童話をしてもそのまたは、たとへ教育的見地にたつて話をしてもその心理についての理解がなければ、幼兒達は、きく話に興味索然たるか、または反つて負擔を増して感情教育の上に、何等の効果をもたらさぬ、こゝに於て私は、幼兒のもつ想像の性質、更には、これに加はつてゆく興味についていさゝか研究の一端を述べてみようと思ふ。

今その主な氣の付く點を一つ、二つ述べてみると幼兒のきく話は、どこまでも幼兒それ自身を中心にしてゐなくてはならない。幼兒を客觀としてとりあつかふことは、幼兒の想像の性質を無視したものであつて、結局失敗した御話になつてしまはなくて

はならない。すなはち、「ごらんなさい子供達が大よ
ろこびですよ」とか、「ブランコは子供のよろこぶも
のです」と云ふやうな取扱が即ちこれである。よろ
しくこれは「ごらんなさい太郎さんも次郎さんも大
よろこびですよ」と云ひ、「ブランコはほんどうに何
て面白いでせうチー」と云ふべきである。こんな、デ
リケートなことは何のことに値しないと思ふ方が
あるかもしれないが、これはやがて童話そのもの、
全體の取扱にかう云ふ間違つた、幼児の心理からは
なれた方法をとることを意味するものであつて、注
意すべきことのつたることを失はぬ。

も一つ、幼児が描く童話の世界に、悲劇はない、
どこまでも樂天的であり、善因善果であり、計畫は
遂行される。悲劇的な結末をもつもの、善い事の結
果に悲しむべき破綻の來ること、計畫したことが途
中で破れて悲劇に終ること、などは幼児の世界に於
て必ず矛盾を來すものである。悲劇的結末に對する
興味や想像の働くのはずつと後年のことである。た
とへば、この世の中に行はれてゐる社會の實相につ
いて語つて、善人必ずしも榮えずと云ふやうなこと
や、よくある、虚言で人をだましてゆく話にその虚

言が見破られてどうどう殺されたと云ふやうなのは
この間の話の破綻である。試みに、桃太郎の話に終
りに桃太郎が戦に敗けてうち死したとして話をきつ
たら如何であらうか、思ひなればに過ぎるものがあ
らうと思ふ。

この他、幼児が話のすぢよりも、その部分部分の
話に興味をもつこと、なども注意すべき事である。
即ち、幼児の想像は斷片的、かつ聯想的であるから
必ずしも首尾一貫するを要せぬこともある。この場
合幼児は、その部分部分の話に自分の想像と興味の
満足を感じてゆくのである。

この他種々の心理的事實が幼児にきかせる話につ
いての指針を與へてゐる。是等の事實については實
際の觀察——きくときの幼児の態度、よろこびの状
況等——をして、その上にたつてこれを導くために御
話を選択してゆくことは幼児の教育の上に怠つてな
らないことの一つで、日常幼児に接する人達に特に
のぞんでやまないところである。(一九二〇、二二、二三)